朝鮮半島における植民地日本語文学の本流*

朝鮮で刊行された日本伝統詩歌資料をめぐって

嚴 仁 卿
✉ uik6650@korea.ac.kr

* この論文は2013年韓国政府(教育人的資源部)の財源で韓国研究財団の支援によって行われた研究(KRF-2007-362-A00019)の成果である。

1. 植民地日本語文学と日本伝統詩歌ジャンル

1990年代半以降、韓国と日本では「二重言語文学」、「植民地日本語文学」と称される植民地時代に書かれた「日本語文学」に関する研究ブームが起こり、多くの研究者によりこれまで文学史記述において排除されてきた朝鮮人作家と在朝日本人の「日本語文学」資料が、新たにスポットライトを浴びはじめた。しかし、1900年代初頭からの日本による強制占領期を通して、最も幅広く盛んに「日本語文学」活動がなされたジャンルは、小説や評論、現代詩というよりはむしろ、短歌、俳句、川柳のような日本の伝統的な短詩型のジャンルであった。つまり、在朝鮮日本人(以下、在朝日本人)の生活や情緒を表わした文学・文化に関する文献[1]を紐解くと、朝鮮半島における「日本語文学」は俳句や短歌、川柳といった日本の伝統的な短詩ジャンルがもっとも盛んに、しかも絶え間なく大量に創作されていたことが理解できる。さらに、この短詩型伝統詩歌ジャンルに限っていえば、1900年代初めという比較的早い時期から朝鮮半島各地で、文学結社や組織を基盤にした様々な形態の文学的活動が行われていた。このように文学結社や主要メディアをもとにした小規模な活動は、やがて1920年代初期から京城(今のソウル)を中心とした朝鮮半島各地で、ジャンルごとの専門雑誌や歌集、句集の発行へとつながっていく。

特に、1920年代と1930年代は、朝鮮半島における日本の伝統的な詩歌ジャンルの全盛期にあたる時期である。当時、すぐれた日本の作家たちが朝鮮半島に渡り、様々な流派をつくりお互い競合しながら、日本の伝統詩歌の文学専門雑誌、あるいは単行本を刊行していた。またホトトギス派においては、日本の中央文壇と緊密なかかわりを保ちながら、各地におかれていた支社を通じ、朝鮮半島の各地域と日本の文壇をつなぐネットワークを構築するに至っていた。京城で創刊された短歌雑誌『眞人』のような文学専門雑誌は、1924年の創刊当時は日本の

1 朝鮮の開港から1945年にいたるまでに在朝日本人らが朝鮮半島で刊行した日本語文献は、現時点で15,000余件の現存本が確認されている。高麗大学校日本研究センター土台研究事業団(2011)『韓半島·満州における日本語文献(1868~1945)目録集』(全13巻, ソウル：図書出版ムン)の第1・2巻の韓半島単行本と第8巻の韓半島連続刊行物の数値による。

雑誌よりもすぐれた本の装丁で注目を浴び、雑誌の主宰者が日本へ帰国した後も1960年代まで日本で刊行されつづけた。「ポトナム社」も京城で活動を始めた結社であるが、1920年代後半日本へ渡ってから現在にいたるまでその歌壇が維持され続け、『ポトナム』という短歌雑誌が今もなお刊行されている。また数多くの朝鮮人作家も活発に文壇活動に参加し、朝鮮の高浜虚子とまで呼ばれた朴魯植のように、日本でも広く知られた作家が登場するほどの勢いであった。

このジャンルが植民地朝鮮において、量・規模という双方の面で大きな影響力があったにもかかわらず、これまでの研究ではどのような作品集や文学雑誌が存在していたのか、そのうちどのようなものが現存しているのか、という基本的な調査はある程度行われてきた[2]ものの、植民地朝鮮の文壇でどう位置づけられ、また「内地」日本文壇との関わりはいかなるものであったのかなど、総合的には研究されていない。だが、植民地朝鮮で活躍していた文人たちによる植民地日本語文壇は、こうした短詩型ジャンル専門雑誌によって命脈が保たれていたといえるだろう。こうした流れは、在朝日本人による独自の文壇は無かった、あるいは「彼らの文学活動は微々たるものだった」といった従来の見解[3]とは背馳するものである。したがって本稿では、韓国、日本、中国の国公立図書館、大学図書館、古本屋などを対象に調査に取り組み、その結果として確認し得た現存する資料の目録を以下のように紹介する。

2 鄭炳浩・嚴仁卿「韓半島で刊行された日本伝統詩歌文献の調査研究—短歌·俳句関連の日本語文学雑誌及び作品集を中心として—」(『日本学報』第94輯, ソウル：韓国日本学会, 2013、嚴仁卿「韓半島で刊行された日本古典詩歌「川柳」文献の調査研究」(『東亜人文学』第24輯, 大邱：東亜人文学会, 2013)等

3 尹大石「1940年代前半期の朝鮮居住の日本人作家の意識構造に関する研究」(『現代小説研究』第17輯, ソウル：韓国現代小説学会, 2002)。

2. 朝鮮半島で刊行された日本の伝統詩歌文学の専門雑誌

まずは、朝鮮半島で刊行された歌誌、俳誌、柳誌の中で、現存本が確認できた目録の一覧である。

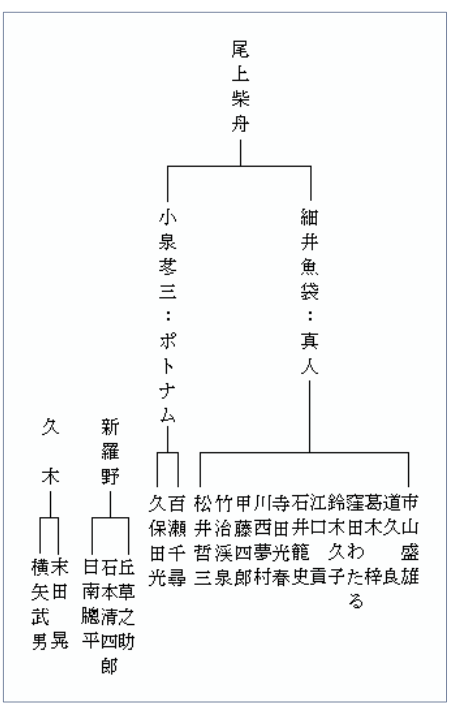
[表1] 朝鮮半島で刊行された日本の伝統詩歌文学の専門雑誌一覧

	雑誌名	収録巻号	主宰・編者	出版社	出版地	現存本の年月
【歌誌】						
1	ポトナム	創刊号~第3巻第5号、第11巻第9号~第23巻3号（欠号有り）	小泉苳三 百瀬千尋等	ポトナム	京城 東京	1922.4~1924.5 1932.9~1944.3
2	眞人	第2卷第1號~第21卷第3號（欠号有り）	市山盛雄 細井魚袋等	眞人社	京城 東京	1924.1~1943.3
3	新羅野	第1巻第10号~第11号 第2巻第7号	丘草之助 原口順等	新羅野社	京城	1929.11~12 1930.7.
4	久木	第5巻第6号、12月号	末田晃	久木社	京城	1932.6 / 12.
5	歌林	第2卷第1號	小西善三	朝鮮新短歌協會	京城	1934.12.
6	朝	第1卷第8號	道久良	『朝』發行所	京城	1940.10.
7	國民詩歌	9月（創刊）号~2巻10月號（欠号有り）	道久良	國民詩歌發行所	京城	1941.9~1942.11

	雑誌名	収録巻号	主宰・編者	出版社	出版地	現存本の年月
【俳誌】						
1	草の実	第100号~第181号	楠目橙黄子 横井時春等	草の実吟社	京城	1933.10~1940.8
2	長柱	第1巻第1號 ~第6巻第12號	西村省吾	朝鮮石楠聯盟	京城	1935.1~1940.12
3	山葡萄	第11巻第2号	江口元衛	山葡萄発行所	元山	1937.2
4	水砧	第1號~第6號	菊池武雄	朝鮮俳句作家協會	京城	1941.7~1941.12
【柳誌】						
1	ケイリン川柳	11月2号~12月3号	横山巌	鶏林川柳社	京城	1922.11~12
2	芽やなぎ	第1号~第7号(欠号有り)	横山大納言 寺田沈澱子	芽やなぎ川柳社	京城	1923.4~11
3	川柳鼓	創刊号	岡部茂太	つゞみ川柳社	平壌	1925.6.
4	川柳砧	41号~54号	向田六寶	きぬた川柳吟社	京城	1926.5~1927.1
5	川柳三昧	第10号~第45号	横山巷頭子	南山吟社	京城	1928.1~1930.12

[表1]にみられるように、植民地期に朝鮮半島で刊行されたもの(タイトルを確認しうる歌誌・俳誌・柳誌は30種以上)のうち現存本が残っているものは16種である。1920年代初めから短歌、俳句、川柳の文学結社は、ジャンルごとの文壇を形成しながら専門雑誌を刊行しはじめていった。

まず、当時の歌誌の現存本から、1920年代から1930年代にかけての朝鮮半島における短歌界の動向を追うことができる。ここでは、1920年代初期に誕生した「半島」歌壇が日本の中央歌壇との連繋を保ちながら勢力を拡げ、次第に内地の有力歌誌へと成長していく状況が把捉できる。そして1930年代の前半には『真人』、『ポトナム』、『久木』、『新羅野』の四流派がそれぞれ歌誌を刊行し競合していたことや、またこれとは別に口語自由律を実践した、新短歌の組織によるユニークな歌誌『歌林』の存在など、これらはかなり多彩であったことも確認しえた。加えて「半島」の歌誌を主導した歌人らによって、大量の歌集が朝鮮半島から出版されており、その背景や契機などがそれらの歌誌には反映されている。したがって『真人』をはじめ、朝鮮半島で刊行された歌誌に関する総合的な研究は、朝鮮半島で営まれた短歌と「半島」歌壇の実態把握は言うまでもなく、「半島」と「内



[図]『真人』による半島歌壇の系統図

［写真］俳誌『山葡萄』現存唯一本の表紙

地」歌壇の連繋、「半島」と「内地」の近代文学論と古典および和歌の意味など、日本語文学を貫く研究になるといえる。

次に俳誌であるが、朝鮮半島では1910年代後半から「ホトトギス」系列の俳句と俳誌がいち早く登場していたが、朝鮮半島において俳句の全盛期といえるのは1930年代である。ホトトギス派だけをみても、京城では『長鼓』、『青壷』、『草の実』、『冠』などが創刊されたのみならず、新義州では『アリナレ』、平壌では『有閑』、釜山では『鵲』、大田では『湖南吟社句集』、光州では『いちご』、木浦では『カリタゴ』、大邱では『かつぎ』など、全国的に発行されていたホトトギス系列の俳誌は10種を越えていたと見られる。これに、元山ではホトトギス派の俳句を排撃した新興俳句系列の俳誌『山葡萄』、ホトトギスと新興俳句を批判した石楠系列の『長柱』があり、半島の俳壇はまさに鼎立状態であった。このように1930年代の朝鮮俳壇は、半島全域の多くの俳人によって支持され、またそれぞれに地域別の俳誌も刊行され、それらを伝統俳句を固守した強力なホトトギス派が主導していた。その中でもとりわけ、俳論の対立、思想的な弾圧、経済的な苦境という悪条件にも拘らず、元山で15年間も発刊され続けた新興俳句の代表的な雑誌『山葡萄』の存在と俳誌の内容は非常に興味深い。これに中間派としての石楠派による朝鮮色豊かな『長柱』も加わり、半島全域に猛威を振っていたことをあわせてみるならば、「半島」俳壇は鼎立状態のなかで俳論と俳句を競い合っていたといえる。三派の主義と内容、志向はそれぞれ異なっていたものの、『草の実』、『山葡萄』、『長柱』などの充実した俳誌を舞台にして、それぞれ「内地」の俳壇流派と連携していた点、そして朝鮮色を前面に出して半島俳壇の代表を自負していたという点には共通点が認められる。

また、柳誌の方であるが、近代川柳は20世紀に入ると日本の阪井久良伎と井上剣花坊により中興をなし、趣味や娯楽性から発展・変化して新川柳として生まれ変わる。明治後半に起った川柳の流行は1910年以後、直ちに「外地」へと波及した。大衆性と風刺性を骨子とする川柳は、1920年代に至るまで「植民地気風と柳風」が「活気ある人間味に於て合致し、直ちに迎合せられ」[4]るという特性から、植民地朝鮮でも大いに享受された。朝鮮半島の各地でも1920年代は川柳吟社が結成され、川柳が旺盛に創作・享受されていた時期である。ところが川柳を専門とする雑誌の続刊は至難であったらしく、「三号雑誌」という不名誉な呼び名で呼ばれ

4 柳建寺土左衛門『朝鮮川柳』(京城：川柳柳建寺，1922)，はしがきのページ.

ていたことも事実である。実際に京仁(京城と仁川)地域で1920年10月に創刊された『南大門』や『神仙爐』、『ケイリン川柳』、1924年3月に閉刊した『芽やなぎ』、平壌で刊行された柳誌『川柳鼓』を見ても半島の柳誌の寿命は非常に短かった。これは1920年代半ばまでの朝鮮半島全域における川柳界の処した現実であったといえよう。このような状況の中、1927年4月に京城で創刊され、1930年12月号(通巻第46号)までが確認できる『川柳三昧』は、朝鮮半島の代表的な柳誌といえる。この柳誌を研究の対象とすることで、これまで断面的な解釈や理解に留まっていた在朝日本人の人物研究、植民地期の言語状況、朝鮮の大衆的な文化と民俗、文学ジャンル間の交渉に関する研究の可能性が開かれた[5]といえる。つまり「外地」朝鮮で有力同人により発行された『川柳三昧』の分析は、生々しい朝鮮の現実と植民者の観察的な視線を捉えるうえで最適な「植民地日本語文学」研究であり、また在朝日本人が朝鮮において営んでいた文学活動や文学観を把握する礎にもなる。

ところが、このような活況を見せた日本伝統詩歌ジャンルの文壇と専門雑誌の刊行は、本格的な戦争期に突入するにつれ、物資不足と動員体制の影響を受けるようになった。やがて総督府当局の指示により、1941年にはすべての雑誌は閉刊を余儀なくされる。そして一ジャンルごとに一雑誌のみの発行が許可されることになると、まず俳壇が動き、急遽朝鮮俳句作家協会を結成して、『水砧』(1941年7月創刊)という朝鮮唯一の俳誌を出した。『水砧』の創刊から二ヶ月遅れ、短歌は詩とジャンル統合を遂げ国民詩歌連盟を誕生させ、機関誌『国民詩歌』(1941年9月)を創刊した。だが、今の段階では川柳分野において、1930年代から1940年代初期までの朝鮮に柳誌があったかどうかは明確ではない。しかし、1943年4月に朝鮮文人報国会が結成された際、朝鮮川柳協会も加わっていたことからすると朝鮮柳壇も存在はしていたようである[6]。

5 嚴仁卿「植民地朝鮮の川柳と民俗学ー雑誌『川柳三昧』(1928-1930)と今村鞆の文筆活動ー」(『日本語文学』第63輯, 大丘：日本語文学会, 2013).

6 1920年代から1940年代前半までの朝鮮半島で刊行された日本伝統詩歌の専門雑誌の特徴と流れについては嚴仁卿「朝鮮半島における日本伝統詩歌雑誌の流通と日本語文学の領分」(『日本思想史研究会会報』第30号, 京都：日本思想史研究会, 2013).

3. 朝鮮半島で刊行された日本の伝統詩歌文学の作品集

上記の歌誌・俳誌・柳誌を発行した文学結社や構成員は、1920年代から1940年代前半にかけて、多くの歌集や句集などの作品集を出している。[表2]で見られるように、朝鮮半島では1920年代から1940年代前半にかけて、22冊の歌集、12冊の俳句集、2冊の川柳句集が刊行されたのである。以下、朝鮮半島で刊行された歌集と句集(川柳句集を含む)の一覧を提示する。

[表2] 朝鮮半島で刊行された日本の伝統詩歌文学の作品集一覧

	歌集・句集名	著・編者	発行所	出版地	刊行年月
【歌集】					
1	歌集 淡き影	市山盛雄	ポトナム社	京城	1922.12
2	莎鶏集	小泉苳三	ポトナム社	京城	1923.6
3	柊	岡嶋鄕子	近澤商店印刷部	鎭南浦	1926.7
4	さきもり	神尾弌春		京城	1928.11
5	松濤園	渡邊淸房	元山短歌會	元山	1928.12
6	麥の花	難波專太郎	眞人社	京城	1929.9
7	高麗野	名越湖風	大阪屋號書店	京城	1929.11
8	(朝鮮歌集序編)澄める空	道久良	眞人社	東京	1929.12
9	韓鄕	市山盛雄	眞人社	東京	1931.2
10	(久木歌集)山泉集	末田晃, 柳下博	久木社	京城	1932.1
11	新羅野歌集 第三	丘草之助	新羅野發行所	京城	1934.1
12	(昭和九年版)朝鮮歌集	朝鮮歌話會	朝鮮歌話會	京城	1934.1
13	儒達	儒達短歌會同人	儒達短歌會	木浦	1934.7
14	朝鮮風土歌集	市山盛雄	朝鮮公論社	京城	1936.11
15	松の實	磯部百三	磯部百三先生歌集刊行會	京城	1937.2
16	朝鮮	道久良	眞人社	京城	1937.3
17	現代朝鮮短歌集	現代朝鮮短歌集刊行會			1938.5
18	聖戰	道久良	眞人社	京城	1938.9
19	歌集 朝鮮女流六人集	小倉進平	日韓書房	京城	1941
20	國民詩歌集	國民詩歌連盟	國民詩歌發行所	京城	1942.3
21	愛國百人一首全釋 附・愛國短歌集	末田晃	國民詩歌發行所	京城	1943.3
22	和魂	楠田敏郎	大洋出版社	京城	1944.7
【句集】					
1	朝鮮俳句一萬集	户田雨瓢	朝鮮俳句同好會	京城	1926.9
2	合歡の花	新田留次郎	近澤茂平	京城	1927.2
3	金剛句歌詩集	成田碩内	龜屋商店	京城	1927.9
4	朝鮮	笠神句山	京城日報社學藝部	京城	1930.3
5	朝鮮俳句選集	北川左人	靑壺發行所	京城	1930.8
6	河越風骨遺句集	河越朝彌	草の實吟社	京城	1933.11
7	京城句集	高田宇外, 海市綠村	句集刊行會	京城	1934
8	梨の花	小山空々洞 外 4人	梨の花刊行會	京城	1934.8
9	朝鮮女流俳句選集	海地福二郎	句集刊行會	京城	1935.7
10	くすり吐く	川崎千鶴子	朝鮮印刷株式會社	元山	1935.11
11	落壺句集	後藤鬼橋, 大石滿城	落壺吟社	京城	1936.7
12	枯蘆	淸原伊勢雄	近澤書店	京城	1943.12
【川柳句集】					
1	朝鮮川柳	柳建寺土左衛門	川柳柳建寺社	京城	1922.10
2	朝鮮風土俳詩選	津邨瓢二樓	橋本印刷所	京城	1940.9

[表1]の雑誌を主導した歌人や俳人、柳人たちは、だいたい[表2]の単行本の歌集や句集のような作品集の刊行にも直接、あるいは間接的に関与している。また朝鮮半島で活動していた歌人と俳人たちは数多くの作品集を企図し、それを実現させていたことが文芸雑誌の記事や広告、作品集の序、あるいは跋文にあたる内容からも読みとれる。

このような資料の調査と一覧を分析することにより、朝鮮では1920年代から短歌、俳句、川柳といった日本の伝統詩歌ジャンルにおける「半島」文壇が存在し、専門雑誌と作品集による活動を広げていたことが確認された。同人・団体を根幹とした歌誌・俳誌・柳誌により「内地」と「半島」、京城と朝鮮半島の各地方を結ぶ巨大な文壇が形作られており、これらを日本語文学雑誌と作品集が媒介していたのである。つまり、日本の伝統詩歌ジャンルにおいては、明らかに「朝鮮半島の植民地文壇」が形成されていたといえる。

4. 中国の旧「満洲」地域と台湾で刊行された日本の伝統詩歌関連資料

日本の伝統詩歌ジャンルの影響圏は朝鮮半島に留まるものではなく、日本の「中央」文壇は無論、旧満州地域などの「大陸」、台湾や「南洋」などとつながった巨大なネットワークを形成していた蓋然性も非常に高い。「植民地日本語文学」の中でも、日本伝統詩歌の幅広い創作と流通は朝鮮半島だけの現象ではなく、旧「満州」地域や台湾をみても事情は大同小異だったことがわかる。たとえば、旧「満州」地域で刊行された短歌、俳句、川柳関連の資料の一覧は次のとおりである。

[表3] 中国の旧「満洲」地域で刊行された日本の伝統詩歌作品集一覧

	書名	著・編者	出版社	出版地	刊行年月
【短歌資料】					
1	註解豪吟詩歌集	今村貞治	大道館編輯部	哈爾濱	1936.8
2	滿洲年刊歌集 第1集	荒川石楠花	滿洲歌友協會	大連	1940.6
3	滿洲年刊歌集 第2集	柳生昌勝	滿洲歌友協會	大連	1941.9
4	歌集 滿洲を詠へる	永原いね子	滿洲歌友協會	大連	1941.8
5	在滿女流歌人十人集 歌集 草原	柳生昌勝	古典文化研究會	大連	1942.11
6	短歌中原歌集 第1集	八木沼丈夫	短歌中原滿洲支社	大連	1944.9
【俳句資料】					
1	大連俳句會句集 第1集	和田壽太郎	大連俳句會	大連	1929.4
2	滿洲昭和俳句集附 ・滿洲俳人名鑑	和田壽太郎	大連俳句會	大連	1930.9
3	大連名所俳句	高山峻峰	大連觀光協會	大連	1938年以後
4	俳句滿洲 第1卷/第4號	吉田長次郎	滿洲公論社	新京	1943.12
5	俳句滿洲 第2卷/第5號	吉田長次郎	滿洲公論社	新京	1944.6
6	大陸俳句の作法	大場白水郎	奉天大阪屋號書店	奉天	1945.7
【川柳資料】					
1	川柳大学	中沼若蛙	大連川柳会	大連	1926.8
2	句集川柳共栄圏	小園新吾	川柳大陸社	大連	1942.10

また、台湾においても『高砂歌集』(高砂同人歌集編輯會編、高砂同人歌集編輯會、臺北、1924)、『臺灣俳句集』(三上武夫編、ゆうかり社、臺北、1928)、『歌集臺灣』(平井二郎編、あらたま發行所、臺北市、1935)、『あけぼの歌集』(あぢさゐ歌會同人著、あぢさゐ歌會、花蓮港廳、1936)など、数多くの歌集と句集などが確認できる。したがって、日本伝統詩歌の大量の創作は植民地期の東アジアにおける共通の文学的な現象だったといえる。それゆえに今後、東アジアにおける歌壇、俳壇、柳壇のネットワークと実像を追跡することは、植民地日本語文学の大きな課題の一つであると思われる。

以上の資料を通し、短歌・俳句・川柳という日本伝統詩歌ジャンルが「植民地日本語文学」の本流をなしているといっても過言ではないことが確かめられた。これら日本伝統詩歌の資料により、東アジアにおける「植民地日本語文学」研究の新たな領域が開拓されることを期待する。

嚴仁卿 In-Kyung UM

(韓国) 高麗大学校日本研究センター。助教授。日本古典の近代における受容、「外地」の日本伝統詩歌ジャンル、韓日比較文化論など。『한반도・중국 만주지역 간행 일본 전통시가 자료집(전45권)』(서울：이회, 2013)、「朝鮮半島における日本伝統詩歌雑誌の流通と日本語文学の領分」(『日本思想史研究会会報』第30号, 京都：日本思想史研究会, 2013)、『재조일본인과 식민지 조선의 문화1』(서울：역락, 2014)など。